

水 凌 集

帰 省 子 小 野 耐

梅酒やとろりと月日溶かしゐて
あるじ来て述ぶる口上洗鯉
潮浴びの乙子が父を独り占め
三猿をきめこむ長き屋寝かな
撫でられて猫くたびれし盆の家
生垣の多き古里つづれさせ

鋼 の 街 矢 削 み き 子

青胡桃水系に富む鉄の道
をとつひも今朝もこの場所守宮の子
門前やたつぷりと水打つてあり
西日尽くうつぶし色の海のこり
手花火のおはりの風のにほひかな
宵祭庁舎の明り未だ消えず

八 月 三 和 幸 一

犬洗ふ周りびしよ濡れ草の花
畳屋の眼けはしき残暑かな
汲み置きのバケツを並べ原爆忌
今生きて今の水飲む敗戦日
稲妻の重なる宵となりにけり
釣糸にかすかなあたり秋の暮

花 水 柴 田 靖 子

羊皮紙の楽譜に付箋花水
この町に七坂ありぬ桐一葉
閻王の軸のゆらりとお風入
雷激し天地創造かと思ふ
蓑虫に風のゆりかごありにけり
多彩なるスイスの言語株干す

梨 松 本 節 子

活字みな蠢きさうな残暑かな
足跡を波が攫うてゆく晩夏
送り火の中を讀経のつきすすむ
八月の畑に生るものみな歪
梨食めば梨の音して夜の深し
見送りの絵図は若冲鉾離子

兜 虫 富 井 恵 子

爪半月消えてをりたる極暑かな
炎昼や禽は大樹に息ひそめ
角みがきては戦はず兜虫
魂祭卒寿の叔父に父の貌
教へ説く僧に日の差す地藏盆
両横にいもと座らせ地藏盆

星 月 夜 井 上 康 子

めざめれば待ちゐしやうに蟬時雨
闇の中念仏きこゆ大文字
どの星もみほとけ在す星月夜
望むもの何もなきいま星月夜
浴衣着て鏡の前を動かれず
庭のある家の恋しや百日紅

怠 け 蟻 大 城 和 子

幾万の蟻の世なるも怠け蟻
緑蔭の賽銭箱に猫眠る
墓終ひの話など出て盆用意
弥治郎兵衛独り拗ねたる夏の午後
慕ひきし友の呆けや蟬哭ぶ
嫋嫋と洩れくる声明今朝の秋

岩 清 水 総 田 隆 信

落成の祝太鼓や雲の峰
白扇の手首効かせて開きけり
ラムネ瓶に昔語りの弾みけり
岩清水自転車来て止まりけり
百日紅犬あごを出し舌を出し
大夕焼軽やかに海に入る

夾 竹 桃 川 島 美 枝 子

夾竹桃咲き平和なる今の幸
八月や父の忌日の近うなり
初盆の友の句にふれ感無量
端居して余生つくづく思ひをり
精一杯吾が身支へるこの暑さ
日焼せる登校の子の元気欲し

星 月 夜 服 部 喜 美 子

高原の宿なつかしき星月夜
最後まで粘りし頃や盆踊
草そよぐほどの風あり花木榿
夕影の道くるくると木榿落つ
秋夕焼好きな童謡歌ひ出す
鴉よく鳴く日秋蟬声ひそめ

盆 用 意 藤 田 晴

老二人心ばかりの盆用意
淡々と濁世の外に生身魂
身に籠る一日の疲れ法師蟬
退院の一步しつかと秋風へ
身を包む風の秋めく夕かな
すつきりと去りし嵐や暁の虫

夏 の 果 て 竹 内 正 幸

夏の果て砂場の小さき忘れ物
鬼灯の凭りかかりある小さき墓碑
鬼灯の赤あふれしめ婆の墓
触れごとのあるがに戸ごと朝の蟬
終戦日父在るごとき仏間かな
遥かなり七夕の竹伐りしこと

踊 西 敬 介

付き添はれ湯浴みしたまふ生御魂
盆唄に紀文船出の件かな
病室へ夜つびて届く踊唄
盆過ぎの渋滞へ子を送り出す
決勝の外野をよぎる秋あかね
みどり子の顔も斯くやに紅芙蓉

夏 惜 し む 本 庄 百 合 子

船の音の軋む水郷夏惜しむ
烏瓜の花夕風の遍路道
草の葉に縋りて蟬の蛻かな
校庭に届く海鳴り月見草
極楽の色かと思ふ夕焼かな
吹奏楽部の得たる金賞晩夏光

に ら め つ こ 宮 本 須 臧 子

孵化りたては目玉の泳ぐ目高の子
曾孫とにらめっこして盂蘭盆会
御霊膳の一品主役芋茎剥く
送り火の跡くつきりと残る芝
秋の夜の句会難渋したる夢
髪切つて涼し鬼婆返上す

星月夜

村片秀哉

いつせいに玻璃戸の響く花火の夜
啞蟬の飛び込んで来し運転席
文鎮の埃をぬぐふ星月夜
たうもろこしダンスの様にのけぞりぬ
降りしきる雨の八月十五日
朽ちさうな丈余の櫓なり秋出水

ラムネ玉

吉田恭子

駅ごとの大津絵の鬼秋暑し
水運の栄えし名残り鮎の宿
意のままにならぬ事増えラムネ玉
白絢父の記憶の薄れゆく
舟縁をたたかく波音秋澄めり
茜さす比叡真向ひ湯びき鱧

おいしい話
その②
【ブナ】
高橋順子

ブナは山毛櫸と書いたり、
樺と書いたりする。木材とし
ては無用の木であると思われ
てきたらしいが、無用の無で
はなくて、ブという音をもっ
てきたのではないか。

たとえば銅という字は金に
同じと書くが、そんなことはないので、これはドウとい
う音をもってきたのだろう。現代詩を書いている者の世
迷い言ですが。

いまブナ林は水を溜める天然のダムの役割をすると珍
重がられている。ところでブナリンというのかブナバヤ
シというのか、秋田の友人の高校同級生で、林業を営ん
でいる人に聞いてみたが、「ほくはブナリンと言いますね」
ということだった。「でもスギリンやマツリンと言いませ
んよね」と私。どっちなんだろう。森は人の手が入って
いないところ、林は入っているところだと教えてくれた。

白神山地を訪れたとき、湿原は雨で木道がすべって歩
きにくかった。奥のほうのブナの木に大きく名前が彫り
つけてあつて、苔むしていた。「あ、これ知ってる」と林
業氏は言った。幼な友達だそうだ。

晩は、きりたんぼ鍋と馬刺し。おいしかった。

公益団法人俳人協会